

妬み嫉みのほこり

おやさと研究所長
深谷 忠一 Chuichi Fukaya

『稿本天理教教祖伝』の62頁に、

庄屋敷村の生神様の、あらたかな靈験を讃える世間の声が、高くなるにつれ、近在の神職、僧侶、山伏、医者などが、この生神を論破しようと、次々に現われた。

とあります。

教祖伝の前半は、貧しい者に物を施しての救済が主でした。中山家が傾くほどの施しをされたのですが、それは、言わば、与えっぱなし、出しっぱなしで終わりました。教祖は見返りを求めて施しをされたわけではなく、物による救済が失敗だったというわけではありません。が、しかし、それで、親神様の教えが広まったかという、そうではありませんでした。物の与えを頂いた人は、その時は喜んで、この道の信仰にはつながらなかったのです。

しかるに、教祖の救済が、「をびや許し」から病だすけに進んで、生命・身体に関わる困難が解決されるようになると、その恩義を感じる人たちが大勢参拝に来るようになりました。そして、それと同時に、自らの生業の上に本教が邪魔になると考える人たちが、教祖に言いがかりをつけに来るようになったのです。

それで、こういう乱暴狼藉に対して、教祖がどういう御態度であったかについては、諸井政一著の『正文遺韻』(40頁)に御教祖様は、素より神様の御社でありますから、かゝる時にも泰然として、さからひもせず、又にげかくれもせず、いうへとして御座るのは、何もふしぎな事ではない。否寧ろ、かくあるべき筈の事でござりまして、実にわれへに、「ほこりはよけて通れよ、ほこりにさからうたら、自分も又ほこりをかぶらにゃならん程に、けしてほこりにさからうやないで」又「しんじつもつてこの道つとめるなら、いかな処も、こはきあぶなきはない。神がつれて通るほどに、決しておめも、おそれもするやないで」と、お聞かせくださいまする処の、手本をかいてくださったのでござります。

と記されています。

つまり、世間からの止め立て、言いがかりや乱暴狼藉に対しての教祖の御態度は、「ほこりは、よけて通る」ということであり、逃げ隠れもせず反抗もせずというものだったのです。

さて、この『教祖伝』の史実のように、世間からの反対・攻撃に遭遇することは、今の時代においてもあり得ることです。布教師が食うや食わずの貧のどん底を通っている時は、世間の人は自分たちには関係のない輩だとして近寄らない。よくそんな生活ができるものだと同情する人はいても、それ以上の関心は示さない。ところが、その布教師のもとに信者さんが集まり賑やかになると、近所の住民などがいろいろなことを言い出す。太鼓や拍子木の音がうるさい、人や車の出入りが多くて危ない、変わった建築で住環境が壊される等々のクレームが出たりするのです。

この道の信仰は、生活の質の向上・豊かになることを否定するものではありません。教祖のひながたが、貧に落ち切られることから始まっていることをもって、“物を所有することが人

間の幸せへの障害になる”かのように論じられることがありますが、そうではありません。もし、物を所有せずに貧のままにいたことが人々の幸せの条件なら、教祖は施しをされない方がよかったです。しかし、そうではなくて、貧から抜け出すのが人々の幸せにつながるのです。施しをされたのです。“心だすけ”はもちろながら、“豊年満作で、物質的に豊かにしてやりたい”、“病まず弱らずで、健康に過ごさせてやりたい”というのが、“をや”の心なのです。

困窮している者を物心両面でたすけたいのが“をや”の思いですから、それを具現化する立場の布教師は、物心共々与える一方で通ります。その結果、自身は貧に落ちることになります。それは、一面では、“物への執着をとり、心の明るさを得る”修行なのですが、しかし、いつまでも目の前に物があれば執着心が出るのでは、心が成人できたとはいえない。つまり、やがては、物のあるなし・貧富に関わらず、心の明るさが保たれるようになる。そして、また、効能の理という点からしても、お道を真剣に通っていて生活環境が良くなることはないわけで、初期は飲まず食わずの布教道中であっても、やがては貧乏しようにもできなくなる時がくるのです。

しかし、他方、そこで大事なことは、人々・家々の伏せ込みの年限・大きさ・深さの違いで、成ってくる姿に違いがあることを忘れないことです。「おさしづ」に、

教会は世上いくつもあるやろう。何も無き草深い処から始めた道、俺が芯やへと突っ張っても、頑張りても、どうもならん。理は見えねど、皆帳面付けてあるのも同じ事、月々年々余れば返す、足らねば貰う。平均勘定はちゃんと付く。(明治25年1月13日)

とあるように、親神様の方からすれば、皆それぞれの理の伏せ込みを漏れなく受け取って、それに応じた守護をして下さっている。ところが、うっかりすると、道の中の者どうしても、各々の伏せ込みの違いに思いを致さず、現在の姿だけで比べてしまうことがある。「同じ天理教なのに、あそこは結構やなあ」と、妬み嫉みの心を持ってしまったりするのです。しかし、それでは、天理教が立派になるのは面白くないと、世間の人たちが弁難攻撃を仕掛けてきたのと大差がありません。おやしきの賑わいが現出するまでに、教祖がいかに長年ご苦労下されたかを考えず、自らの徳の足らぬところを顧みず、妬み嫉みから反対攻撃をしてきた神官僧侶医者など何ら変わらなくなります。つまり、教内のお互いが妬み嫉みの心を持たないように注意することも、このひながたから学ぶべきなのです。

道を通る上で、世間からの反対攻撃、身近な人からの妬み嫉みを受けることは、そういう“ひながた”があるのですから、いつの時代の信仰者でも当然経験することです。しかし、それにひるむ必要もなければ、ことさらに身構える必要もない。それを鏡に自らの妬み嫉み心の有無を点検しつつ、外に向けては、“ほこりはよけて通る”という態度で、怖めず臆せず、においがけ・おたすけに邁進すればよいのです。